

竹内好のアジア論

—「心情」と思索—

(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

比較日本文化学

学生番号 : D095743

氏 名 : 劉金鵬

本論文は、戦後日本知識人の一人である竹内好のアジア論を考察したものである。

竹内好は本来中国文学研究者出身で、評論家として活躍し始めたのは終戦直後のことである。彼は東京帝国大学在籍中、武田泰淳らと「中国文学研究会」を結成し、雑誌『中国文学』を舞台にして、中国文学および中国文学が代表する中国思想界の最新動向を日本に紹介し続けた。戦争で様々な挫折や苦難を味わった彼は、戦後、中国をはじめアジアを見直し、日本文化のあり方や東洋と西洋の文化の差異について、数多の論考を残した。

近年、竹内好に関する議論がふたたび盛んになっている。たとえば、2004年9月、ドイツのハイデルベルク大学で「竹内好をめぐる諸問題」という国際シンポジウムが開かれ、松本健一、加々美光行、孫歌など代表的な竹内好研究者が招かれた。翌年、中国の上海で孫歌の問題提起を受ける形で竹内好を論じるシンポジウムが開催された。それに続いて、2006年、愛知大学の主催で竹内好再考に関するシンポジウムが開かれた。ただし、こうした研究の中に、竹内好のアジア主義に関する言説に対する注目は少ない。これと関連して、竹内好がアジア主義を論じる際、重要なキーワードの一つである「心情」はほとんど議論されていない。従来竹内好の思考方法やその思想の現実性についての研究は多いが、本論ではこれまで掘り出された方法を用いて、竹内好の言説の中に含まれるヨーロッパとアジア、日本と中国、というような概念の理論的な展開について考察し、竹内好のアジア論が展開する方向に沿いながら、彼の発掘したアジア主義の価値を今日の時代状況と結び付ける可能性を探りたい。そして従来の研究と異なる視点として、一貫して竹内好の中に論理的な方法論を発掘するより、一つの試みとして「心情」という要素の重要性を提示したい。

第一章では、1944年12月の『魯迅』の発表まで考察の対象とし、竹内好のアジア的な「心情」の形成について論じる。1943年12月から1946年6月まで竹内好は軍に徴集され中国に配属された。この間の活動は殆ど記されていない。また、1946年から竹内好は本格的に思想家として活躍していた。竹内好の生涯を貫く基本的な思考様式はこの時期すでに形成されていた。この時期の彼の思想的な動向が後の彼の思想につながっていることを明らかにする。

竹内好は留学を機に中国と本格的に出会い、中国人との間に「共通のルール」を感じ取り、客観的な研究対象と異なる視線を中国に向けた。同時代の中国文学を日本に紹介し、日本で中国研究の新しい分野を開拓したことでよく知られているが、彼は中国と出会うと同時に、日本がアジア的連帯を図るべきという「心情」がこの時期に生まれたのである。決して戦争を支持するわけではなかった竹内好は、日本の対米開戦時に戦争を支持する決意を宣言した。この宣言

の中に、「近代の超克」に動員された知識人たちと同様な「心情」が潜んでいた。中国を研究対象にしながら現実の中国に無関心な日本の知的状況より、日本軍に配られた宣伝冊子にある「日中提携」の論調に感動した竹内好は、戦後日本において「アジア主義」を提起する思想家としての姿勢を見せていた。加えて、魯迅を描くことで、竹内好は近代化に対する独特な考え方を獲得した。

第二章では、近代化の理論についての竹内好の独特な分析を中心に、竹内好の近代化に対する考え方を検討する。彼は中国文学研究者として、文化的に日本・中国・ヨーロッパを比較し、近代という原理を再考察した。この文学論から思想論への進出は、彼の初期思想とは無関係でない。戦争が終わるまでの活動は、竹内好にアジア的な心情を植え付けた。同時に、日本が発動した戦争は彼に大きな課題をもたらした。彼は、戦争の源を日本の近代化に求め、「アジアの後進国」の中で最も早く成功したといわれる日本の近代化はどのような性質を持つのかを、ほかのアジアの国々、特に中国と比較することによって明らかにしようと試みた。

アジアの近代化は、西洋の近代化を学ぶのではなく、西洋の近代化に抵抗しながら如何にして自身を認識し直し、不断の抵抗によって自己を創出する歴史過程だと竹内好は主張した。彼は、近代化は西洋の模倣以外に、それぞれのパターンがあると考え、日本と中国の近代化と比較し、日本の近代化を批判した。この「近代化の型」論は、しばしば竹内好の思想の中心的方法論として重要視され、竹内好を解釈、また批判するときに取り上げられる。しかし、この論は完全なる理論として成立しておらず、むしろ欧米に接触するときに発生した「心情」に頼らざるを得ない性格を有していた。

第三章では、竹内好の近代化論の読み方について考察する。従来、彼の「近代化の型」論に対する理解はさまざまである。鶴見俊輔は本質的に近代主義者である発想に基づいて竹内好の近代化論を理解し、孫歌は『魯迅』の中に抽出された竹内好の思考方法との共通性において近代化論を解読した。また、溝口雄三は中国研究の立場から中国を理想化した竹内好の欠点を指摘する。これらの読み方を検討したうえで、近代化論とアジア論の繋がりや隔たりを発見する。

第四章では、竹内好がアジア主義の「心情」に接近した契機を探る。戦後日本における反省の風潮の中で、戦前「大東亜共栄圏」の宣伝に利用されたアジア主義に対する関心は低く、アジア主義のイデオロギーはダブー視されていた。これまでに研究において、竹内好の思想には一貫した方法論があり、これが彼のアジア主義研究を可能にした、というのは共通認識である。この共通認識に対して本章では、1950年前後、アジアのナショナリズムという新しい視点が日本に導入された際、竹内好は日本のアジア主義を見直す契機を獲得したことに

注目する。彼はアジアのナショナリズムと関連させて、アジア主義研究を可能にし、アジアのナショナリズムを取り扱う新しい方法を提示した。

竹内好は、日本の自己認識を問題にし、進歩の道を唯一だと考える思考を改めるために、新たな自己認識を求め始めた。アジアのナショナリズムと日本は無縁である、あるいは、アジアのナショナリズムを日本に導入するという考え方に対して、竹内好は日本の思想史の中にアジアのナショナリズムと共通するものを発掘する方法にこだわった。このように時代の課題と格闘した竹内好の姿を描き出す。

第五章では、「心情」の発見について議論を展開する。彼は、「近代の超克」をはじめとする一連の文章で、戦後日本の再建をめぐる諸問題を歴史の中で議論し、近代から問題の一貫性を発掘した。明治政府は脱亜を選択し、逆にアジア的な心情を利用した。これは、戦争イデオロギーを二分させる根源となった。

アジアのナショナリズムと共通するものは、「近代の超克」にみられる「心情」である。かつて知識人の戦争への情熱の表現とみなされた座談会「近代の超克」は、戦後において文学人の私的活動として描き出された。戦後の民主主義建設の風潮の中に、「近代の超克」を否定する考え方は、歴史との断絶として竹内好の目に映った。彼は、「近代の超克」を救う余地はアジアに向けられる「心情」であると指摘し、これを出発点として、日本が起こした戦争がもつ思想的な二重の構造を引き出した。この延長として、竹内好は戦争批判に用いられた文明一元論を批判し、文明一元論を否定すべきアジア主義の論理とアジア的な「心情」が結合できなかつた状況を日本のアジア主義に求めた。

第六章では、「心情」の展開について考察する。1960年前後、民主運動としてあらわれた安保闘争は、竹内好にアジア的な伝統の価値を再認識させた。彼が、この運動をアジア的なナショナリズムの顕現とみなす理由は何であり、このアジア的なナショナリズムに何を期待したか、ということを知りたい。さらに、60年代以降、安保闘争の経験から竹内好は明治百年祭を提案したが、最終的にこの提案を撤回したと述べた経緯を整理する。近代論が流行したこの時代には、アジア主義はどのように議論されたか、この章で検討する。

アジア主義への関心は、1960年安保闘争に参加した経験と深くかかわっている。竹内好は、安保闘争をアジアのナショナリズムと通じる運動としてとらえ、安保終息後も安保闘争の経験を如何にして深化させるかについて、思索に耽った。彼は、明治維新からの歴史をアジア主義の角度から考察することによって、「近代の超克」からさかのぼってアジア的な「心情」を再発見した。しかし、知識人を動員するスローガンである「近代の超克」と同様に、アジア主義は日本のアジア侵略を隠ぺいする「大東亜共栄圏」のイデオロギーとみなされ、タ

ブー視された。そこから「心情」を取り出す竹内好の思索は、不本意ながらも、「大東亜戦争肯定」の論調を引き出した。さらに近代化論が流行するという複雑な思想の状況の中に、明治維新をアジア主義の視線から見直すという竹内好の希望は、同時代の左翼的知識人に理解されず、結果が保証されない「心情」と、批判の俎上にあげられた。

第七章では、「心情」の帰結を探索したい。竹内好の「明治維新と中国革命」の比較を手がかりに、彼のアジア論の延長方向を探る。「近代化の型」論で提起した「明治維新と辛亥革命」の比較は、1960年代後半でさらに豊富になった。竹内好は、辛亥革命から中華人民共和国の成立にかけて、中国の革命に一貫するものがあると説いた。そして、毛沢東の根拠地理論に注目し、中国革命を推進する原動力であると考えた。と同時に、同時代世界的な大きな出来事として、文化大革命に対する竹内好の考え方を示す資料をできる限り発掘する。

安保闘争の経験を深化させるために、アジア主義を発掘する努力は失敗に終わり、竹内好は明治維新と中国革命をつなげる探索を試みた。しかし、この探索は中国の混迷する情勢の中で終わりを告げた。代わりに、文革に対する沈黙や中国の核実験に対する支持の中で、竹内好の「心情」は、戦争中の決意宣言と重なり、むしろ逆戻りしたようにも見える。

第八章では、視点を変えて、日中知識人の科学に関する論争を通して、近代化過程における「アジア的な心情」の存在を考察する。竹内好は戦後、アジア主義研究において「アジア的な心情」の存在を提示し、戦争イデオロギーと見なされてきた「近代の超克」を再発見した。そこで、本章は20世紀初頭中国で発生した「科学と人生観」論争を取り上げ、座談会「近代の超克」と比較しながら、ヨーロッパ的近代に対する「抵抗」の代表として支持されていた竹内好の中国像を検討し、最後にタゴールの中国訪問を通じて、アジアにおける「近代を超克する」心情の様態を探る。

ヨーロッパに対して、単なる肯定や否定はいずれもこの「心情」の中からはつながらを探し出すことは可能であるが、この「心情」は対抗でありながら、一つの様態ではない。

終章では、現在中国において進行している竹内好批判とあわせて、竹内好の提起したアジア論の普遍性とアジア論の内部における衝突を描き出す。

結論として、「アジア主義」の意味は、歴史の表象であるアジア連帯より、単線的な発展思考に対抗するところにある。「アジア主義」に求められるのは、自立精神、他者理解、共同意識がある。こういった価値は、「心情」という様態で存在し、理論化されていなかった。竹内好は、思想史の中に「心情」を持ち込むことによって、思想家としての独特さを示し続けた。加えて、現在進行中の

竹内好批判やアジア主義に関わる言論について、今日の思想状況とあわせて、竹内好のアジア論を継承する方法を提示したい。